

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ゴジラ キング・オブ・モンスターズ

2019年/アメリカ映画

配給：東宝/132分

2019 (令和元) 年6月1日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

監督・脚本：マイケル・ドハティ
出演：カイル・チャンドラー/ウェ
ラ・ファーミガ/ミリー・ボ
ビー・ブラウン/ブラッドリ
ー・ウィットフォード/サリ
ー・ホーキンス/チャール
ズ・ダンス/トーマス・ミド
ルディッチ/アイシャ・ハイ
ンズ/オシエア・ジャクソ
ン・Jr/デヴィッド・ストラ
ザーン/渡辺謙/チャン・ツ
イー

👁️👁️ みどころ

日本が生んだ怪獣「ゴジラ」は、今やハリウッドでも「GODZILLA」として大人気のキャラに。そのため、芹沢博士が登場したハリウッド版『GODZILLA』（14年）に続いて、第2弾の本作が登場！そのクライマックスではゴジラvsキングギドラの“頂上対決”が実現するとともに、『キネマ旬報』2019年6月上旬特別号では、「“20世紀の神話”ふたたび『ゴジラ キング・オブ・モンスターズ』」の特集も！

日本版のゴジラは原水爆の悲劇が強調されていたが、原爆開発国アメリカではそれは希薄。そのため、眠っているゴジラを蘇生させるために原爆を爆発させるという奇策には唖然！そりゃ、いくら何でも・・・。

また、ハリウッドではGODZILLA意外にもキングコングが大人気。すると、ラッセル博士の戦略（野望？）が潰れた後は、GODZILLAvsキングコングの“更なる頂上対決”が・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ “あのシリーズ” はダメだが、“このシリーズ” は二重丸■□■

5月7日付産経新聞夕刊は、「アベンジャーズ、タイタニック抜いた！」の見出しで、「アベンジャーズ エンドゲーム」（19年）の世界興行収入が5日までに約21億8900万ドル（約2415億円）となった。20億ドルの大台突破は5本目で、「タイタニック」（1997年、約21億8700万ドル）を抜いて歴代2位の作品となった。」と報じた（史上最高額は『アバダー』（09年）の約27億8800万ドル）。続けて「『エンドゲーム』はアイアンマンやキャプテン・アメリカ、スパイダーマンなど、漫画出版社マーベル・コミックの

キャラクターが同じ世界に登場するシリーズ2 2 作目。アベンジャーズ作品としては完結作になる。」と報じた。このように同作は、公開前から大きな話題を呼んでいたため、私も4月27日に鑑賞したが、あまりのくだらなさに途中で席を立ってしまい、鑑賞作品にも入れなかった。

私は、『ロッキー』シリーズは大好きだし、『スター・ウォーズ』シリーズもまずまず好きだが、『アベンジャーズ』シリーズは全くダメ。しかして、日本で1945年に公開された『ゴジラ』へのオマージュいっぱいハリウッド版『GODZILLA』(14年)が公開されたのは、2014年だが(『シネマ33』254頁)、そのシリーズ第2作(?)となる本作の反響と出来は?

1954年に日本で公開され、観客動員数961万人という初代日本版『ゴジラ』のデジタルリマスター版たる『ゴジラ(1954)』(『シネマ33』258頁)との「新旧対比」は面白かった。また、『シン・ゴジラ』(16年)は日米安保を前提とした日本の防衛のあり方をしっかり考えさせる名作だった(『シネマ38』22頁)。ハリウッド版『GODZILLA』がいかに成長しているのかにも大いに注目すべきだから、ハリウッド版『GODZILLA』シリーズの第2弾(?)は期待大。もっとも、ハリウッドでは『GODZILLA』に続いて、2017年には『キングゴング 髑髏島の巨人』(17年)(『シネマ40』未掲載)が、『モンスター ヴァース』シリーズとして公開されているから、本作はシリーズ第3弾になるらしい。しかして、鑑賞の結果は大満足。したがって、私には“あのシリーズ”はダメだったが、“このシリーズ”は二重丸!

■□■主役はあくまで米国人博士夫妻! そのスタイルは堅持! ■□■

『GODZILLA』では、ストーリーを動的に迫っていく若者はアーロン・テイラー=ジョンソン演じるフォード・プロディだったが、実質的な主役は、研究機関「モナーク(MONARCH)」で働くジョー・プロディ博士とその妻のサンドラ・プロディ博士だった。それは、その続編たる本作も同じで、本作は中国・雲南省にある、モナークの前進基地に住むエマ・ラッセル博士(ヴェラ・ファーミガ)が、娘のマディソン(ミリー・ボビー・ブラウン)と共にモスラの幼虫が卵から誕生する瞬間を目撃するシーンからストーリーが動き始める。暴れ始めたモスラは、施設を破壊し始めたから大変だが、なぜかエマが起動させた“オルカ”と呼ばれる音響装置によってモスラはおとなしくなったから一安心。ところがその時、ジョナ(チャールズ・ダンス)をリーダーとする傭兵部隊が基地を襲い、ラッセル博士とマディソンがオルカと共に連れ去られたから、さあ大変だ。

前作でも「GODZILLA」の登場は中盤からで、導入部は巨大な卵からムートーが誕生する物語だったが、それと同じように本作の導入部もモスラの誕生からとなる。しかし、本作はそこにジョナ率いる謎の傭兵によるラッセル博士の拉致と、“ある陰謀”という要素が入っているから、少し話がややこしい。ラッセル博士の元夫のマーク・ラッセル(カイル・

チャンドラー)は、ラッセル博士と共同でオルカを開発していたから、ラッセル博士の救出を目指すモナークの幹部である芹沢猪四郎博士(渡辺謙)がマークに協力を要請したのは当然。しかして、本作中盤以降のストーリーの1つの軸が、マークと芹沢博士が傭兵部隊の下である働きを続けるラッセル博士の救出という人間ドラマになるから、主役は必然的にマークとラッセル博士という米国人博士夫婦になる。

近時のハリウッド映画は中国(資本)への“すり寄り”が顕著だが、本作は主役はあくまで米国人博士夫妻のスタイルを堅持している。したがって、「アメリカファースト」を唱えるトランプ大統領支持派の国民は一安心・・・?

■□■芹沢博士の存在感と役割は?■□■

『ゴジラ(1954)』では芹沢博士がキーパーソンだったし、彼が発明した「オキシジェン・デストロイヤー」が後半のストーリーを牽引した。また、アメリカ版『GODZILLA』でも、渡辺謙扮するセリザワ博士はそれなりの存在感を持ち役割を果たしていた。そこでのセリザワ博士の説明は、「原子炉を体内に抱えたゴジラと放射物質をエネルギーとするムーターとは闘いが宿命づけられている」というものだったが、そのセリザワ博士の確信通り、同作のクライマックスは、サンフランシスコでの「怪獣大決戦」になっていった。

そんな日本が誇るべきセリザワ博士の存在感と役割は、本作でもバッチリだから、日本人としては大いにそれを応援したい。もっとも、本作前半では、モスラの登場に続いてモナークの南極基地を占拠した傭兵部隊がラッセル博士と共にオルカを使って氷漬けのキングギドラを蘇らせてしまうから、モナークの主たる任務は否応なくキングギドラへの対応になっていく。そして、本作でも芹沢博士が発明した「オキシジェン・デストロイヤー」の出番が訪れるが、さあ、それはどんなシークエンスで?そしてまた、その効果は?

■□■中国人女優の存在感と役割は?■□■

他方、近時のハリウッド映画では中国人俳優の起用が目立っている。『ゼロ・グラビティ』(13年)では、アメリカの宇宙船が破壊された後は、中国の宇宙ステーション天宮と中国の有人宇宙船・神舟に頼っていた(『シネマ32』16頁)し、『オデッセイ』(15年)では、ラストに向けて宇宙の上での米国と中国との協力のシークエンスが顕著だった(『シネマ37』34頁)。さらに、チャン・イーモウ監督の『グレートウォール』(17年)(『シネマ40』52頁)では、万里の長城を舞台とした壮大な歴史劇(?)に、ハリウッドの大スター、マット・デイモンを主役で起用したうえ、“イーモウ・ガール”としてチョー美人の司令官や女性ばかりで構成された華やかな鶴軍を登場させて、米中合作モノにとんでもない華やかさを注入していた。

しかして、本作のそれはチャン・ツイイー。チャン・ツイイーは、モナークで働く考古人類学者で、双子の妹のリン博士との一人二役を演じている。もっとも、ハッキリ言って

本作での彼女の存在感は薄い。これは、トランプ大統領の中国製品に25%の関税をかけるとの大号令で始まった米中貿易（関税）戦争がますます深刻になっていることの影響？ 去る5月25日～27日のトランプ大統領の訪日では、安倍首相とのゴルフ、大相撲観戦、居酒屋会食と、新天皇との宮中晩餐会と蜜月関係にある日本を反映してか、芹沢博士の存在感が重いのにに対して、中国人のリン博士の存在感は実に軽い。もっとも、これほど激しい「米中貿易戦争」の時期でも、映画の世界では米中の共同作業なされているだけ、まだマシ・・・？

■□ラッセル博士の恐るべき戦略は？■□

『ゴジラ（1954）』も『シン・ゴジラ』も、ゴジラの登場に対する人間側の対応の仕方の「論点」がシンプルだったが、本作はあらゆる怪獣のオンパレードになる華やかさ（？）があるうえ、モナークvs傭兵部隊の対立が顕著だし、モナーク内部の意見の相違もあるから、とにかく話がややこしい。さらに、本作中盤では傭兵部隊に拉致されたラッセル博士の恐るべき戦略が実行されるので、それに注目！

「肉を切らせて骨を切る」は、剣道の極意であると同時にすべての戦いの極意。また「毒をもって毒を制す」も昔から大切にされている教えであり、これも戦いの極意だ。しかし、ラッセル博士は人類によって汚染されてしまった地球環境をリセットするためには、この極意の通り、オルカを使って地球上のすべての巨大生物を覚醒させて、巨大生物と共存する新たな世界を生み出すしかないと考え、傭兵部隊と共に世界各地でそれを実行に移していたわけだ。そこで実現したのが、ラドンvsキングギドラの戦い、更にはその“勝者”たるキングギドラvsゴジラの戦いだが、そんな戦いを続けていけば人類そのものが滅亡してしまうのでは・・・？したがって、そんなラッセル博士の恐るべき戦略の是非は・・・？

どちらかという、そう考えるのが常識派だ。しかし、その常識派の立場に立ったモナークは、芹沢博士が開発した新兵器オキシジェン・デストロイヤーを使用してキングギドラとゴジラを一括して「処理」することを決定！なるほど、そうすれば、本作も『ゴジラ（1954）』で描かれたラストと同じような結末に・・・？

■□ゴジラの蘇生は？原爆の活用は？いやいやそれは？■□

『キネマ旬報』2019年6月上旬特別号は、「20世紀の神話」ふたたび『ゴジラ キング・オブ・モンスターズ』の特集を組んでいる。日本人の私としては、日本が生んだ怪獣ゴジラがハリウッドでここまでてはやされていることにビックリ！もっとも、ハリウッドはゴジラが怪獣王であることは認めているものの、他方でハリウッドにはキングコングという米国が生んだ怪獣王がいる。したがって、次回作はその“キングコング”と“ゴジラ”との“頂上決戦”になるらしい。それをみても、ハリウッドではゴジラはあくまで

一つの道具としてしか扱っていないことがわかるが、日本でゴジラが生まれたのは原水爆実験の悲劇によるもの、という悲しい現実があったことを忘れてはならない。そのことは『ゴジラ（1954）』をみればよくわかるが、残念ながら、本作におけるゴジラは「one of 怪獣たち」つまり、たくさんの怪獣たちの1つ、そして、キングギドラに最もよく対抗しうる最強の怪獣というだけの位置付けだ。

『ゴジラ（1954）』では、芹沢博士が発明したオキシジェン・デストロイヤーがゴジラによく効いた。しかし、今では半径3キロメートルの生命体を殲滅させるというオキシジェン・デストロイヤーも、どうやらゴジラとキングギドラに対して効果がなかったらしい。しかし、それによってゴジラはどこかに消えてしまったから、アレレ……。それに対して3つの頭を持つキングギドラは、ゴジラが姿を消した後も我が物顔で怪獣の王としての行動を続けていたから、人類はヤバイ。そこでモナークが考えたのは、ここでも「毒を以て毒を制す」。つまり、ゴジラのエネルギー源は原爆だから、ゴジラを発見しそこで原爆を爆発させれば、眠っているゴジラはエネルギーが補給されて復活するはずだというもの。しかし、そんなバカなことがホントにありうるの？もしそうだとすると、一体誰がゴジラの側まで行って原爆を爆発させるの？いくら何でもそんな設定はムチャクチャだが……。

■□■芹沢の命は？頂上対決は？ラッセル博士の構想は？？■□■

本作のクライマックスはもちろんゴジラとキングギドラとの頂上対決になるから、資金をタププリ注ぎ込んだハリウッド式の製作手法でそれをいかに楽しく観せる（魅せる）かが大きなポイントになる。それだけのカネをかけた以上、それに対応する巨大な宣伝費も使ってシネコンに観客を大量動員しなければ製作費の回収が難しくなるから、ハリウッド式映画制作も大変だ。もっとも、そのクライマックスを導くためには、ゴジラの蘇生が不可欠だから、それに向けて日本人の芹沢博士が神風特別攻撃隊の特攻精神で単身ゴジラが眠っている洞窟に原爆を持って向かうので、それにも注目！

芹沢の特攻精神（自己犠牲）によって、新たな原爆のエネルギーを注入されたゴジラがどれほど強力になるかは、容易に想定できるはず。そうなれば、いくらキングギドラが3つの頭を持ってゴジラに向かってきても、頂上対決の勝者は明らかだ。そして、そうなるとラッセル博士の構想は根底から覆ることになるから、ラッセル博士と傭兵部隊の動静は……？さらに、ゴジラがキングギドラをやっつけた後の“その他大勢”の怪獣たちの動静は……？

それらについてはあなた自身の目でしっかり確認し、次回作でゴジラvsキングコングの“更なる頂上決戦”がどんな構想で実現するのかを、楽しみながらゆっくり考えたい。

2019（令和元）年6月11日記